

離島—大崎上島—の歴史伝承における課題と克服

— 石踊一則の文化事業を事例に —

中道 豪一*¹

Challenges and overcoming of remote island history transfer

— A case study of Kazunori ISHIODORI's cultural project —

Goichi NAKAMICHI

本稿は大正年間に発行された『大日本職業別住所入明細図之内 広島県 賀茂郡竹原町 豊田郡木ノ江町』(以下『明細図 豊田郡木ノ江町』)という1枚の地図の復刻と、それにまつわる人物の考察を通し、大崎上島(広島県豊田郡大崎上島町)という離島地域における歴史伝承の課題と展望を描き出すことを目的とした。

なぜ『明細図 豊田郡木ノ江町』に焦点を絞るのかというと、二点ほど理由が存在する。執筆者は平成24年に大崎上島の歴史研究を開始し、平成25年より広島商船高等専門学校(広島県豊田郡大崎上島町)大学COC事業で歴史文化研究に関わっているが、平成28年時点の大崎上島における伝承・教育・交流の実態を鑑み、当該史料が高い教育的価値を及ぼす可能性を持っているにも関わらず、注目されていない事態にあることが一つ目の理由である。そして二つ目の理由が、石踊一則(あき書房：広島市南区)という人物によって大崎上島の地図の評価と復刻作業が行われ、地域における歴史伝承における課題克服の糸口になったという事実があるからである。

現在大崎上島では、広島商船高等専門学校の大学COC事業「離島の知の拠点形成—離島高専の教育研究と離島の振興・活性化—」、幼稚園から高校までを視野に入れた「大崎上島学」の実践が行われている。さらに海外のグローバルリーダー育成を主眼とした中高一貫校に関する事業が進行しており、これ以降、一層のローカルな歴史文化基盤の活用と構築が求められると共に、日本国外との交流・発信を想定したグローバルな展開も予想される。しかし歴史的仮名遣いや古文・漢文素養の希薄化に起因する「100年前の文献が読めない」といった問題や「江戸時代どころか1~2世代前のことがわからない」といった状況が各地で発生しているのが現状であり、それは大崎上島でも例外ではない。

そうした状況下、歴史伝承の現場において日本語文献に加え、「過去の日本語テキストが読めなくとも、効果的な伝承・教育・交流成果を期待できる効果的教育資源」として「地図」という選択肢が認識されるのは有益であるし、そうした課題を克服しようとしたケーススタディーとして特定の人物の足跡—ライフヒストリー—を認識することは貴重であると考えられる。

以上の点から、本稿は『明細図 豊田郡木ノ江町』という地図、そしてその地図を復刻した石踊一則のライフヒストリーを探ることで、地域伝承に必要なツール・人物像を指摘したい。

キーワード：大崎上島，木江，石踊一則，大日本職業別住所入明細図，歴史伝承，教育，地図，復刻，広島

*1 流通情報工学科 非常勤講師

1. 地図の概要と歴史伝承における価値

まず本稿で取上げる『明細図 豊田郡木ノ江町』は大正15年(1926)、東京市外浦田の平田嘉吉によって発行された地図である。形態は55×79cmの両面刷り、表面は広島県豊田郡木ノ江町と広島県賀茂郡竹原町の商業地図が記され、裏面には職種別一覧表が掲載されている。表面に印刷された広島県豊田郡木ノ江町は、現在の大崎上島町木江のことで、往時の町の姿を窺うことのできる史料となっている。



図1 『明細図 豊田郡木ノ江町』

ここで『明細図 豊田郡木ノ江町』の価値について触れておきたい。当然のことながら地図という出版物は「経済活動や日常の便に供すること」が目的で刊行される。よって経年・区画整理・大規模災害等による街並みの変化が生じると、刊行当初の目的は果たせなくなるわけだが、歴史伝承の視点からすると「過去の町の姿を保存する史料」としての価値を指摘できる。例えば発行された大正15年生まれの人であれば、平成28年に90歳を迎えるわけだが、その人にとって『明細図 豊田郡木ノ江町』は若かりし頃の町の姿を克明に記録した史料なのである。そしてさらにここから「思い出」が語られ、それを書き残し伝えていくことができれば『明細図 豊田

郡木ノ江町』は、「過去の町の姿を保存する史料」に加え「伝承を喚起する史料」としての意味合いをまとい、存在意義を増す展望が期待できる。

さらに大きな価値として考えられるのが「容易に読み解くことが出来る史料」としての意味合いである。これはつまり歴史的な活字史料・資料を読まなくとも視覚を通し直観的に歴史を体感できることを指すわけだが、具体的には「ここは知っている」「ここは昔〇〇だった」「ここは今でもあるね」といった感想がそれである。こうした感想は各人・各世代で異なってくるのが当然であるから、そうした作業を通し感想を蓄積させていくなれば「容易に読み解くことが出来る史料」に加え「各人・各世代をつなぐ史料」として展開させていくことが可能である。

以上、『明細図 豊田郡木ノ江町』を歴史伝承の立場から考えると「経済活動や日常の便に供すること」という地図刊行本来の価値とは別に、「過去の町の姿を保存する史料」「伝承を喚起する史料」「容易に読み解くことが出来る史料」「各人・各世代をつなぐ史料」といった価値を見出すことができることを示した。要するに過去・現在・未来を生きる人々を結び付ける基点としての史料活用法を示したわけだが、これは既に実践中の方法でもある。一例を挙げると平成28年度「すみれ祭」で行った聞き取り調査では、『明細図 豊田郡木ノ江町』の他、様々な視覚史料を用意することで、貴重な証言を集めることに成功した。またこの調査を通して、大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師で「大正広重」と称された吉田初三郎が大崎上島を描いた鳥瞰図の存在が明らかになり、貴重な地域史料を認識できたのは喜ばしいことであった。この鳥瞰図は大崎上島の協力もあり、平成28年9月に広島商船高等専門学校で開催された日本島嶼学会大会で展示を行い、研究者をはじめ関係者への周知を図ったわけだが、地図にはこのように人と人、史料と史料とのつながりを喚起する役割・価値があることを強調しておきたい。

2. 地図の記載について

では『明細図 豊田郡木ノ江町』を実際に見てみよう。まずは地図裏面に記載されている「木ノ江町」の説明を挙げる。(適宜句読点を加え旧字体を新字体に改め、ふり仮名を加えた)

地勢
とよた ただのうみ
豊田郡の南部 忠海町の西南海上八海里を隔つる大

崎上島の東南岸に位し、西南北の三方は山岳を以て圍繞し、北は東野村、西は中野村、南は大崎南村に界り、東方は内海に面せる一帯の地にして愛媛県大三島と相対す沿岸は入海深く天然の港湾をなす。而も内海航路を前面に控へ常に運炭船の出入繁く、又高浜、今治、宇品、尾道等に至る運輸の便多く、瀬戸内海に於ける唯一の要港なり。

遠隔情況

往古の古書に見れば木ノ上とあり。又伝説に甲ノ浦とも云ひ、何(いづ)れも詳ならざるも通称木ノ江と伝ふ。小学校付近一帯の平坦地は明治初年頃迄は入海にして古より船津として知られ未だ一の漁村に過ぎざりしが地の利を得、船舶の出入頻繁なるに伴ひ造船業発達し人家調密し漸次市街地をなすに至り、現在港湾の内、西岸地帯は中野村に、東岸地帯は東野村に行政区画の異りたるを大正九年一月一日各々分割し、其区域を以て木ノ江町として町政を実施したり。

主要物産

石灰 350,000 俵、石粉 205,879 呎(かます)、雨合羽 17,650 枚、造船 新 20 隻 修 45 隻、農産物 25,810 円

現在 (13 年調)

戸数 735 戸、人口 3,399 人

交通里程 裡

鮎 2.5、尾道 20.0、竹原 6.0、今治 9.0、忠海 8.0、高浜 27.0

上記の記載が地図裏面に記され、その下に「営業別索引(イロハ順)」が続く。その内訳は以下の通りである。各種別項目に従い、其々の商店名と連絡先が記載されている。

- 「官衙学校」「社寺碑」「銀行会社」「素封家」「医院」
- 「石粉、炭、印刷、飯食」「履物店」「製帆業」「弁柄製造業」「陶器、時計、撞球」「旅館、料理、理髪」「家具、金物、菓子」「雨カッパ製造」「産婆看護師」「家畜市場」「化学工業」「洋服商」「燥場」「製樽業、煙草商」「造船業」「請負業」「運送業」「薬品商」「屑物商」「化粧品、小間物」「芸娼妓置屋」「演劇」「葡萄栽培、袋商」「呉服商」「米雑穀商」「鐵工業」「酒仲買業」「酒造業」「材木雑貨」「牛乳」「牛馬商」「焼酎醸造」「醤油醸造」「書院」「書籍文具」「寫眞」「諸進物商」「自轉車、自働車」「木炭」「船具商」「石油石炭」「青

物乾物商」「潜水業」「染色業」「製綿業」「製油業」

現在の木江を知る者からすると驚くべき繁栄ぶりである。かつての木江は造船・海運で栄えた町だが、その事実を体感できるのが営業店舗の多さであろう。ただその衰退も激しく、例えば県道 65 号線を南に下り進行方向右側にある「竹本医院」は現在でも看板を確認できるものの、「明細図 豊田郡木ノ江町」に紹介された店舗の多くは現存しない。

図 2 木江中心部



また地図から比較的容易に認識できる差異としては、木江の町を走るひらがなの「く」の字形の道路(現在の県道 65 号線、図 1 参照)が挙げられる。「図 2」を見ると北の鮎崎方面から郵便局、区裁判出張所、町役場、巖島神社を抜けて走った先、この地図では「御堂荒物店」「正島齒科医院」の場所から南に向かって直線の道路(現県道 65 号線)が描かれている。しかし現在はこの道路とは別に、海側の広い道路が開通しており、埋め立てと町の推移を見て取れるポイントである。なお県道 65 号線だが、その町並みがしばしばガイドブック等の案内に掲載される場所でもあるが、自動車が一台通行するのが精いっぱい道の幅であり、こうしたギャップも理屈抜きで歴史を体験できるポイントとして認識してよい。

さらに木江という土地柄に特化した見方を挙げるなら、造船所数の比較も意義深いものとなろう。近年、大崎上島はブルーベリーやサーモンを始めとする食品方面で注目を浴びることが多いが、やはりその歴史を俯瞰した際、造船の島としての歴史を見逃すことはできない。平成 28 年現在、大崎上島で稼働している造船所は十指に満たないが、「明細図 豊田郡木ノ江町」には、「造船業(造船業)」として 10 の

事業所が記載されている。「皆本造船所」「岡田梅吉造船所」「藤原種吉」「松浦造船所」「村岡長蔵」「岸本造船所」「幾田新一郎」「森造船所」「松下仙助」「野賀上梁架造船所」) もちろん事業規模等の問題もあるため、事業所数に限った単純な比較は慎むべきだが、かつての繁栄を如実に認識できるポイントとなる。

以上、地図に記されている基本的な事項を紹介すると共に、地図から読み取ることができ、かつ歴史伝承の一助となると思われるポイントを紹介した。地域学習で町並みを歩くことも貴重な体験だが、こうした史料が、その体験の価値を増す力のあることを強く指摘しておきたい。

3. 石踊一則について

この地図を復刻したのが石踊一則であることは先述したが、そもそも石踊は広島市南区皆実町に店舗を構える古書店「あき書房」の店主である。昭和22年、鹿児島県霧島市に生まれ、1歳の時に広島県呉市へ移り済んだ石踊は、商社で3年間勤務した後に、東京都神保町の名門古書店 南海堂書店で修業。昭和51年広島市南区皆実町に「あき書房」を開業した。

近年、BOOKOFFといった新古書店が有名だが、あき書房はそういった店舗とは一線を画した昔ながらの古書店である。この石踊の復刻した『明細図 豊田郡木ノ江町』が歴史伝承活動上、様々な価値をもち実際に活用していることを述べたが、そもそも石踊は何者で何故地図を復刻しようとしたのだろうか。地元メディアの記事を中心に石踊の姿を確認しよう。

まず紹介したいのが「変遷映す広島地図 復刻あき書房石踊さん 軍都や復興 5枚」(『中国新聞』朝刊 平成25年3月27日)である。ここで復刻と報じられた地図は、明治・大正・昭和に発行された地図を指す。この時に復刻されたのは、日清戦争が起きた明治27年(「改正実測広島市街全図」)をはじめ明治37年(「実地踏測広島市街全図」)、大正4年(「広島市街新地図」)、昭和5年(「最新広島市街地図」)、昭和21年(「広島復興都市計画街路網公園配置図」)発行の5枚を指すが、明治37年と大正4年の2枚は広島市公文書館(広島市中区)や広島県立文書館(広島市中区)も収蔵していない史料価値の高いものだった。

石踊はこれらの他にも地図の復刻事業を手掛けており、その嚆矢は今からおおよそ10年前の平成18年にまで遡ることができる。そして平成18年に昭和4年の広島市街図を発掘して復刻して以降、現在まで

22種類の地図を復刻しているという。

地図の復刻作業に関して、歴史に親しく触れる機会のない人には「その意義がわかりにくい」との声もあるが、その社会的評価は高い。石踊は平成27年に広島市街地全域の詳細な番地と、現在は存在しない町名が示された『大広島市街地図』(昭和8)、呉市が市政30周年を記念して発行した『大呉市計画区域地図』(昭和7)を復刻した。その際、地元広島の中国新聞をはじめ、朝日新聞と読売新聞といった全国紙がその復刻を報じているので、その記事から地図復刻と、それにまつわる石踊の人物像を確認しよう。まず岡本玄「ともに 被爆70年の夏」(『朝日新聞』平成27年8月2日)は以下の様に報じる。

きっかけは、1枚の広島市街地の地図だった。その年の夏、知り合いの古書店で入手した。それまで、地形図は見たことがあったが、この地図には商店や旅館、病院などの具体例まで記されていた。「当時の文化を知る手がかりになる」。多くの人に見てもらおうと、年末に復刻版を出した。新聞記事で紹介されると、初日だけで約250人が買いに訪れた。予想をはるかに上回る反応だった。広島の街は、一発の原子爆弾で廃墟になった。爆心地の周辺の地名は消え、今の地図からかつての街を読み取ることができない。「自分につながる先祖や地域の歴史を知りたい、という人がいっぱいいるんだと分かりました」

岡本は原爆で灰燼に帰した広島の姿を伝えようとする石踊の意識と、その意識から生まれた地図が、自分の先祖や地域の歴史を知ろうとする人々にとって有益なものとなった事実を伝えているが、山本美菜子「戦前の生活薫る 復刻地図」(『読売新聞』平成27年7月31日)も、そうした一幕を報じている。

石踊さんは約40年前から古書店を営みながら、古い地図を収集してきた。これまでに広島、呉両市のほか、福山市などの明治以降の市街地の地図22枚を復刻している。県内外の人から「家族が昔住んでいた場所を調べたい」などの声が寄せられ、「病みつきになった」という。

ここに石踊の復刻が、歴史伝承の一方通行的な発信ではなく、昔を知らんとする人々の願いや思いと通じるものである、との事実が浮き彫りにされていることは重要である。

こうして復刻された地図の一部を挙げる。なお大崎上島木江の地図は「6」、平成 25 年に復刻された地図は「11」、平成 27 年に復刻された地図は「12」「13」にあたる。

- 1:『明治 34 年 4 月新版 廣島商業地図 軍都と廣島 附巖島全図 縮尺約八千分之一』
- 2:『復興前後の廣島案内図』(昭和 26 年当時の商工業別廣島地図 昭和 4 年 9 月改正当時の営業別住所入明細図)
- 3:『戦時下の廣島 昭和 14 年当時の地図と職業別明細図 廣島市(番地入)』
- 4:『廣島市総合圖鑑(番地入) 昭和 24 年復興中の廣島』
- 5:『地図で見る広島あゝのころ今、甦る昭和 33 年広島市街地図 業種別早見表付 縮尺二万三千分之一』
- 6:『大正 15 年 5 月発行 大日本職業別住所入明細図 地図で見る造船の街 豊田郡木ノ江町 安芸の小京都 賀茂郡竹原町』
- 7:『日本新廿五勝鞆之浦(昭和 2 年) 鞆 廣島縣沼隈郡鞆町営業別明細図 附録日東第一形勝鞆の浦案内 一鞆の浦鳥瞰図一』
- 8:『昔ながらの情緒残る街、福山 昭和 15 年当時の福山市内地図』
- 9:『呉 海軍の街(明治・大正・昭和) 明治 40 年呉市街之略図 大正 5 年呉市街地図 大正 13 年呉市街新地図 昭和 10 年最新大呉市街地図』
- 10:『昭和 12 年 大日本職業別明細図 佐伯郡・山県郡全図』
- 11:『明治、大正、昭和の移り変わり 広島市街地図』
- 12:『昭和 8 年 3 月 大廣島市街地図 一附巖島地図一』
- 13:『昭和 4 年 6 月 大呉市計劃区域図』

全体を通して指摘できるのが、単なる住居地図ではなく、商売人や営業の人向けに作られた地図を選んで復刻しているという点である。いうなれば「生活感」を感じ取れる地図を復刻しているという点は、石踊の人物を考察する上で見逃すことはできない。

こうした点を掘り下げて表現しているのが宇城昇「記憶の地図」(『毎日新聞』平成 25 年 1 月)である。宇城は最大のヒット作という昭和 14 年の地図にまつわる話を紹介し、次のように述べている。

その 6 年後、米軍が投下した 1 発の原爆で街は消滅

した。地図の裏面には幾百もの広告が掲載されているが、現存する主はいくつも無い。「広島」と記された時代の記憶を収めた地図は、往時を知る人たちと今の世代をつなぐ役割を与えられた。小さな古書店が、歴史の継承という大仕事をしている。

この「往時を知る人たちと今の世代をつなぐ役割」「小さな古書店が、歴史の継承という大仕事をしている」というのは決して大げさな表現ではあるまい。宇城が挙げる「まだ当時を知る人が生きているから。『子や孫と地図を見ながら話ができる』と買っていった人もいますよ」という石踊の言葉は、それを証明しているともいえるからである。そもそも歴史、それも郷土史関係の古書を扱う古書店であれば、自家のルーツや追究すべきテーマを抱き来店する顧客が日々存在しているわけで、宇城の話はそうした日常を表現した言葉ともいえよう。

なお石踊の復刻事業の対象は地図にとどまらない。広島の地元誌『旬遊』(第 7 巻 1 号 通巻 24 号 平成 21 年 3 月 26 日)に福島清「皆実町古書店『あき書房』店主石踊一則といふ男」という一文が掲載されているが、ここには地図をはじめとする様々な資料の復刻が指摘されている。その一部を以下に挙げる。

- 1:『明治中期 鉄道資料』
- 2:『「明治の時刻表・案内記・絵葉書」鉄道文献資料集』
- 3:『山陽鉄道本線』
- 4:『汽車汽船旅行案内 創刊号』
- 5:『日本最古の鉄道運賃表』
- 6:『山陽鉄道案内 復刻版』
- 7:『明治中期 広島近傍二万分一地形図』
- 8:『広島市地名索引』
- 9:『英文熟語集(全)』
- 10:『呉海軍工廠造船部沿革誌』
- 11:『懐かしい瀬戸内と広島』

鉄道関係の書籍を数多く手掛けているが、これも地図の復刻と同じく、生活感を感じ取れることを重んじた結果と考えるのが普通である。しかし復刻された書籍を繙くと、それに止まらぬ意義があることに気付かされる。例えば「4」の『汽車汽船旅行案内創刊号』だが、これは明治 27 年(1894)に手塚猛昌によって出版された、全国各地の時刻表や運賃を掲載

した本である。これは大正元年に創設された Japan Tourist Bureau (後の株式会社日本交通公社、現・株式会社ジェイティービー) の刊行した月刊時刻表の先駆けとなった本であると共に、慶應義塾の福澤諭吉がその誕生に関わった書籍という側面がある。当時イギリスに存在するも日本には存在していなかった月刊時刻表の作成を、福澤が手塚に促したことがきっかけという。

さらに「2」の『「明治の時刻表・案内記・絵葉書」鉄道文献資料集』の中には、広島に山陽鉄道が開通した際の時刻表が含まれており、当時の広島の様子の一端を垣間見ることのできるものとなっているが、この元となった史料は、永井弥六から提供されたものである。永井は『広島県の庄屋』『わがふるさと芸州三田』『安芸高田郡郷土史こぼればなし』といった著作のある人物で、先祖が地域で庄屋を務めていた人物である。そうした人物との交流から歴史的史料が見いだされ、復刻に至るといのは古書店主ならではの人脈として興味深い。

そして復刊書籍の中で一際異彩を放っているのが、慶應四年に出版された小幡篤次郎による日本最初の熟語辞典と言われる『英文熟語集』であろう。以後、英語関係の書籍を見ることはできないため、些か奇異に思う書名ではあるが、これも歴史の継承という観点からすると意義深い書物である。

小幡篤次郎といっても、すぐさま想起される人名ではあるまいが、『学問のすゝめ』を福沢諭吉と共に著した人物—正確には『学問のすゝめ』初編の共著者—、貴族院議員・第3代慶應義塾塾長という経歴を見ると、その印象は異なっよう。

この日本初の熟語辞典と言われる『英文熟語集』の評価については竹中龍範『「英文熟語集」解題』があり、復刻された同書に添えられている。

なお書籍に関しては、復刻に際し石踊が便宜上商品名を付けたものも存在する。例えば「1」の『明治中期 鉄道資料』は以下の史料を収録したものである。

- 1: 明治 22 年 8 月 山陽鉄道 兵庫—姫路間汽車運転時刻表
- 2: 明治 21 年 8 月 山陽鉄道 神戸—三田尻 (広島・宇品) 間列車時刻表及賃金表
- 3: 官報附録明治 32 年 3 月 全国汽車発着時刻及乗車賃金表)

全国に古書店は多々あれど、このような復刻事業を手掛ける古書店は決して一般的ではない。奇しくも広島県福山市の佐藤明久(児島書店)も、石踊と同じく郷土資料の復刻を手掛けているが、これは珍しい例であることを付け加えておきたい。

4. 研究者との交わり

前項で石踊が復刻する地図・書籍には「生活感」があふれる傾向を認めることができることを指摘したが、これは単に石踊の嗜好にとどまらない背景を秘めている。それは何かというと一線で活躍する研究者たちとの交流である。

その代表的人物が宮本常一である。宮本は明治 40 年に山口県周防大島に生まれた民俗学者で、昭和 56 年に没するまで日本各地のフィールドワークを行った人物である。その業績は民俗学という学問の枠にとどまるものではなく、失われていく日本の姿を記録するにとどまらず、そこに生活する人たちに寄り添い、時には励まし、時には叱責すら辞さないというスタイルは各地で生きる人々にも強い印象を与えた。

石踊が自身のことを語ったものとしては、平成 6 年の 4 月、『中国新聞』の「緑地帯」というコーナーで古書にまつわる体験談や自身の思いを綴った「古書有情」(全 8 回)があるが、その他に地元広島での出版社淡水社の記念出版本、『河内洛書』(木村逸司編 淡水社 昭和 60)に寄せた「紙魚のひとりごと」が参考になる。この記述と本人からの聞き取りによると、石踊は東京経済大学在学中、武蔵野美術大学の図書館でアルバイトをしていた際に宮本と交流を持ったという。昭和 36 年に博士号を取得した宮本はその数年後、武蔵野美術大学で教鞭を取るわけだが、石踊が勤務した大学 4 年時、すなわち昭和 46 年はそうした在職期間と重なるわけである。

石踊は若かりし頃、ニクソンのドルショックを契機に、一国一城の主となろうと志を立て東京都神保町の名門古書店 南海堂書店へ修業に出る。そこで専売公社『日本塩業大系』編纂における一万冊を超える史料収集の業務等を経験し開業に至るわけだが、その期間も宮本との交流は途絶えることがなかった。さらに宮本の他にも田村善次郎、渡辺則文、岡光夫、林玲子、網野善彦といった研究者とも交流があったことは、たいへん興味深い人間関係といえよう。

稀代の民俗学者宮本をはじめ、宮本と関係する第一線で活躍する研究者たちとの交わりを視野に入れた時、歴史史料の翻刻、それも生活感のある史料に

焦点を絞るとするのは、必然ともいえる関係性が浮かび上がってくるのではなからうか。なお本稿作成のため、本人に聞き取り調査を行ったところ『明細図 豊田郡木ノ江町』の復刻は、宮本のフィールドワークに資するものであったとの証言を頂いた。

5. おわりに

現在、様々な形で地域の文化や歴史を次世代に伝えていこうとする動きが始まっている。その形は一律でなくとも構わないが、一つ気になるのが、地域の文化や歴史は勿論、それを支えてきた先達の業績を無視、等閑視する傾向が見られることである。執筆者は大崎上島の郷土史家である金原兼雄、馬場宏の業績調査を行い、その書籍・出版物の電子化作業を行っているが、両氏を取り巻く環境は決して順風満帆なものとは言い難い。

それを象徴するのが神峰山にまつわる事件である。これは従来「かんのみね(やま)」と呼称されていた「神峰山」が、一時期「しんぼうざん」という従来にはない呼称で地図・海図・道路標識等に掲載されてしまい、その訂正に多大な労力と年月を費やしたというものである。これは金原が歴史史料を繙き、「かんのみね」の正統性と「しんぼうざん」の不確実性を訴え、ついには元の呼称に戻すことに成功したが、それまでに多数の年月が経過したことは忘れ難い。

その原因を容易に指定するのは困難だが、一要因と予想されるのが「歴史や文化を学ぶ意味がわからない」という価値観である。歴史や文化を学ぶというのは、微に入り細を穿つような学術研究やその成果を徹底させるということではなく、当該地域に住む人々が、自らの生活地域の存在意義を確認できる学びを用意することに意味が存する。しかし、そうした学びが事実上うまく機能していない現状を直視すべきと考える。考えすぎとの反論もあろうが、神峰山にまつわる事件は、それが杞憂でないことを示しているのではなからうか。

さらに危機的なのが、多くの日本人が100年目の文献を読みこなすことが困難な時代へと突入していることである。先人の書物や文章を自力で読みこなすことが難しくなっていることは、地域伝承に携わる者としては、強く意識しなければならない点であろう。

以上の問題意識から、本稿は『明細図 豊田郡木ノ江町』が歴史伝承に有効な史料であることを示し、その史料がどういう人物によって世に出されたかという事実を確認することで、地域伝承の場における

課題と克服を考える際、参考にすべきケースを描き出せたと考える。

平成28年10月31日に『毎日新聞』夕刊に「広島ノートから 4」というタイトルで高橋咲子の記事が掲載された。

私は、いわゆる「地図の読めない女」だ。スマートフォンのナビを見ている時でさえ、いつの間にかあらぬ方向へ向かっていることが多い。だから苦手意識があったけれど、広島で出会った地図は大切な存在となった。

1939(昭和14)年発行の「大日本職業別明細図」を広島市の古書店「あき書房」が2011年に復刻したもの。広島市中心部を収め、商店名まで小さな字で書き込まれている。今の平和記念公園には「天城旅館本店」「フレンチアメリカン式洋裁学校」などあり、今の原爆ドーム近くには「大毎(大阪毎日)専売所」の字も見える。

原爆投下前の暮らしはどうだったか、投下時にどのように逃げたかを取材する時にはいつも携えて行った。今や折り目が破れてしまったこの地図を開けば、いろんな人のいろんな情景が立ちあがってくる。そして街を歩くと、かつての街と確かに地続きなのだと思えてくる。

薄い一枚の地図だが、失われた小さな生活がたくさんつまっていて、いとoshii。

今、我々の前に「当たり前」のように存在する「歴史」や「文化」というものは、石踊をはじめとする様々な人々の目に見えぬ努力によって支えられており、そうした努力や活動を可視化させ、多くの人がアクセスできる文化資源とすることは歴史伝承に関わる者の役目であろう。そうした際、高橋が経験したように、歴史や文化に気軽にアクセスできる史料の存在は、一人でも多くの人々がその活動に参画できる入口となるのである。

そしてこうした活動の根柢には、現実とつながることを前提とした学問・学術があることも重要なポイントであろう。アイデアや斬新な発想というのは欠くべからざるものだが、それらを積み重ねた時、そこに奥行きがないと持続可能かつ効果的なものとして成り立ち難い可能性が高いからである。石踊にとっては宮本常一による学問・学術がその位置にあったと思われるが、これは現代の実践者も真剣に考えるべき問題であると思われる。

『英文熟語集』の解題を著した竹中龍範は、その中で次のように述べる。

今回の復刻にあたっては広島で古書店を営むかたわら、うずもれてしまいやすい文化遺産を発掘し、復刻することに情熱を傾けておられるあき書房、石踊一則氏に全面的に協力いただいた。氏はいつも「もっとみんなに、過去にはこういう文化があったのだということを知ってもらいたいのです」と言われる。

歴史伝承とは「もっとみんなに、過去にはこういう文化があったのだということを知ってもらいたいのです」という思いに支えられる点が少なくないと思われるが、その為には今何が必要で何をすべきなのか。石踊のライフヒストリーは、それを静かに訴えかけているように思われる。

□参考文献

- 1) 『大日本職業別明細圖之内：広島縣賀茂郡竹原町，豊田郡木ノ江町（復刻版）』あき書房，平成20
- 2) 林淳一郎「変遷映す広島地図 復刻 あき書房 石踊さん 軍都や復興 5枚」（『中国新聞』朝刊，平成25年3月27日）
- 3) 岡本玄「ともに 被爆70年の夏」（『朝日新聞』，平成27年8月2日）
- 4) 山本美菜子「戦前の生活薫る 復刻地図」（『読売新聞』，平成27年7月31日）
- 5) 宇城昇「記憶の地図」（『毎日新聞』，平成25年1月21日）
- 6) 福島清「皆実町古書店『あき書房』店主石踊一則といふ男」（『旬遊』第7巻1号 通巻24号，平成21年3月26日）
- 7) 石踊一則「紙魚のひとりごと」（木村逸司編『河図洛書』溪水社，昭和60）
- 8) 高橋咲子「広島ノートから4」（『毎日新聞』夕刊，平成28年10月31日に）
- 9) 竹中龍範『英文熟語集 解題』（小幡篤次郎 小幡甚三郎『英文熟語集全復刻版』あき書房，昭和57）